

---

# ソセゴンボールGT

生時(レジェンド)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソセゴンボールGT

### 【Nコード】

N9750J

### 【作者名】

レジエント  
生時

### 【あらすじ】

いよいよ最終章です^^

ソセゴンボールGTとタイトルはなっていますが、ドラゴンボールだとまだ魔人ブウ編です！

## まえがき

まえがき

前作「ソセゴンボールZ」が以外にも多くの方に読んでもらえたので、「ソセゴンボールGT」を書くことにしました。

前作を読んでない方へ

タイトルのソセゴンとは僕が飲んでいる痛み止めから付けました。

ソセゴンボールとは、「ドラゴンボール」のパロディーのようなもので、鳥山先生の「ドラゴンボール」とは一切関係ありません。

また、登場するキャラは僕や一部を除いて、いろんなアニメのキャラをモデルにしています。

## 登場人物

生時・・・作者でもあり、この物語の主人公。

だが、役に立たない。クローン病という患者で病弱な武道家である。

白ご飯・・・坂田銅時が作ったサイボーグ。

かつてはシロ夜叉と呼ばれた最強の戦士。

現在はウーノスケ夫婦の家で飼われている。通称シロ。

ベズーラ・・・惑星トクガ出身のテロリスト。

通称ズラ。

虎乃心・・・未来から来た美剣士。

だが、アナ53の戦いで戦死。

女を捨てた美奈子マルスの弟子で、好意を持っており、最後に自分の気持ちを伝え世を去った。

ピコちゃん大魔王・・・地球侵略を企んでいる。地球のことをちた  
まと言い、名古屋弁を話す宇宙人。

栗八・・・かつては銅時の弟子であったが、彼がまるで。ダメな、  
大人であるため、彼の元を去り、ハゲ仙人の弟子となった侍。

ノムチャ・・・元盗賊。

普段はサングラスをしているが、取ると目が「3」のような目をして  
いる。

目玉の天さん・・・目玉の下に体を持つ妖怪。

趣味は茶碗風呂に入ること。

ハットリチャオゾウ・・・宇宙忍者でズラの知り合い。

如月美奈子・・・この物語のヒロイン。

「キューティーヴィーナス」という愛の戦士だが、プーえもんの四  
次元袋を拾ってから、自分のモノにするなど、本当に愛の戦士なの  
だろうか！？

別の未来では、女であること捨て、銅時に改造手術を受け、名をマ  
ルス・フランソワと変え、地獄の未来を変えるために戦う戦士とな  
る。

また虎之心の師匠。

ウーノスケ・・・人間と妖怪との間に生まれた半妖怪。

能天気で、何事にも深く考えないし、悩まない性格。

妻に生ビードルがいる。

プーえもん・・・天上界からノムチャを立派な盗賊にするために人  
間界に來た猫妖怪。

ハゲ仙人・・・生時と栗八の師匠。

坂田銅時・・・白ご飯を作ったり、ソセゴンボールを作ったりした  
トクガ人。

母星を守るためにズラたちと戦っていたが、敗北したため、地球に  
来てダメ人間になってしまった男。

ミスター・サタロウ・・・ハゲ仙人の弟子で生ビーデルの父親。

生ビーデル・・・サタロウの娘で、ウーノスケの妻。

エリーザ・・・ズラと共に行動している謎の生物。

前回までのあらすじ

伝説である。

7つの玉を集めて1万円払うと、どんな願いも叶うとか叶わないと  
か……

という不思議なボールがあると古より云い伝えられてきた。

その名はソセゴンボールという。

このボールにより、生時は、おかしな……いや、素敵な仲間と出会  
えた。

愛の戦士(？)美奈子、ナンパな妖怪ウーノスケ、砂漠の肺がん……  
…じゃないや、ハイエナノムチャとプーえもんたちだ。

そして、生時たちは、世界征服を企む奇体組という悪の組織を倒し、  
その後もベズーラやペリーザ、アンドロイドナンバー53略してア  
ナ53らと激闘を繰り広げ、地球を救ったのである。



## 第1章 偉大なヒーロー誕生

アナ53との戦いから七日後……

生時がアルバイトのため現実世界に帰ったこともあり、地球は平和となった。

戦士たちも平和に暮らし、白ご飯は、偉大な先生、「グレート・ティーチャー！」略してGTになるため、町の幼稚園に通う事になった。

シロ

「何その設定！聞いてね〜よ。タイトルのソセゴンボールGTってそういう意味なのかよ〜俺に鬼にでもなれって言うのか」

この世界では幼稚園バスなどはないため、園児は歩いて登校しているのだ。

そんなある日、コンビニで強盗事件が発生。

犯人は4人で、警察は応戦するが、なかなか捕まえる事ができずにいた。

だが、このときのために、シロを作った銅時は、昨日シロが寝ている間に改造手術をしており、近くで事件が発生すると、アクショングレート仮面に変身するのだ。

しかもマスクではなくパンツを被っているのだ。

そういえば、こんなようなヒーローいたな〜（笑）

シロ

「何、勝手に改造してんだ！あの親父！しかもパンツ被って、ただの変態じゃないか」（笑）じゃねーよ」

彼は事件現場に着くと、両手を右斜め上に上げて、「ワッハッハッハ」と笑いながら参上した。

変身後は戦闘力が1も上がるのだ。

シロ

「たったの1しかあがらんのかい！」

戦闘力が1も上がったためか、一瞬で犯人をやっつけたグレート仮面。

シロ

「戦闘力ほとんど変わってねーから……俺自身が元々強いだけだから……戦闘力が1しか上がらんのに変なヒーローに改造するな！」

彼は人気のないところに行き、元に戻った。

その時だった。

某アニメの、悪魔のヒーローの格好をした女性が彼に話しかけてきた。

謎の女

「ねえ、今ここにコンビニ強盗を退治した変な格好のヒーローが通らなかった？」

シロ

「いや知らない。っ手言つか、お前のほうこそ変な格好だぞ」

謎の女



「せつかく私が退治しようと思ったのに」

シロ

「あつ、そう……俺急ぐから」

そう言つて彼は幼稚園に向かった。

×幼稚園……果汁組……

この幼稚園にシロは通う事になったのだが、さっきの謎の女もこの幼稚園に通っていたのだ。

彼女の名はデビルウーマン。通称ビル。

ビル

「ね、今日の朝、コンビ二強盗を退治しようと駆けつけたら、すでに変な格好した奴がやつつけちゃったのよ」

イネネーザ

「知っている。ネネ、さっきボー君から聞いた。パンツを被って、ヒーローって言うより、変体らしいわ」

ビル

「シャサオ、まさかアンタじゃないよね」

シャサオ

「ふつ、今朝はオネショしてママに怒られていたから、そんな暇なんてねーぜ」

そのとき、教室に先生がシロを連れて入室してきた。

先生

「えゝ、今日から皆さんとお友達になる。白ご飯君です」

シロ

「どうも白ご飯です。シロって呼んでください。趣味は糖分摂取、特技は目を開けたまま眠れる事です」

先生

「シロくんはなんと私のような偉大な先生、グレート・ティーチャーになるのが夢なんですって」

クラスの皆が驚き拍手をした。

先生

「じゃあ、シロ君、あそこに席が開いているから」

シロ

「はいはい」

そう言つて、席に向かうシロ。

その隣には謎の女こと、ビルがいた。

シロ

「あつ、お前はさっきの悪魔のコスプレ女!」

ビル

「コスプレじゃないわよ。元からこつなの!」

イネネーザ

「アンタ、ビルのパパはねゝ、宇宙の果ての惑星、ガク星を救つた

あの有名なサタン閣下の娘なのよ」

シロ

「いや、知らないから、デーモン閣下なら知っているけど」

彼にとってはどうでもいい話だった。

そんな彼を見て、ビルがシロに質問をしてきた。

ビル

「ね、もしかして、今朝コンビニ強盗を倒したのアンタじゃない」

シロ

「な、何のことかな」

シロは自分が変体だと思われたくないためにごまかした。

シャサオ

「ふっ、ビル、それはないぜ。だってそいつは、あの風間龍二と二人で、鬼爆と呼ばれ、湘南を支配していたワルだろう」

シロ

「おい、おにぎり頭、完全に鬼 と勘違いしているだろう。しかも風間龍二って誰だよ。弾 龍二だろ！」

そのとき！

ビルの携帯が教室に鳴り響いた。

相手はなんと警察からで、バスジャックが起きたから応戦に来てほしいとの連絡だった。

彼女は先生に一言いい、教室を出て現場に向かった。

シロ

「この世界の警察も、あんな悪魔に頼むようじゃ終わりだな」

シャサオ

「フッ、ビルをあまく見ちゃいけないよ。彼女の实力はサタン閣下と互角だ」

シロ

「だからそんな奴、知らないから」

と、その時、彼の体が勝手に動き出した。

彼は近くで事件があれば、勝手にグレート仮面となってしまうのだ。

シロはあんな変な格好をしているのが自分だと知られたくないため、急いで教室を出た。

先生

「あつ、シロくん！」

シロ

「ちょっとトイレだ！（クソ！作者と親父いつか殺す）」

彼が幼稚園を出たところで、グレート仮面に変身した。

そして数十分後……

バスジャックされたバスを彼女はデビルウイングのようなもので空を飛び、バスに飛び掛った。

彼女は一瞬にしてバスジャック犯3人を倒した。

だが、バスは崖のほうへ向かっていた。

彼女はブレーキを踏むが、間に合いそうもない。  
キキッ！

とっ、タイヤが地面をこする音が響く。

だが、間に合わない……と誰もが思ったとき、バスは止まった。  
そう、あのグレート仮面が正面から受け止めたのだ。

ビル

「あっ、アイツは！」

何とか犯人たちを捕らえ、バスを止めることができ、ビルはグレート仮面のそばへ近寄った。

ビル

「あ、あのう……あなたは？」

シロ

「俺は正義の味方グレート仮面！ワッハッハッハ！じゃあな、コスプレ女」

ビル

「コスプレ女……ってやっぱアンタ、シロ君でしょう！」

シロ

「な、何故ばれた！？」

ビル

「コスプレ女って言ったから」

シロ

「しまった！おい、頼むからこの事は内緒な」

ビル

「いいけど、なんでパンツ被っているの？」

シロ

「人には言えないことがあるんだよ」

ビル

「そう……そうよね。私もアンタだから言うけど、私も父も昔は悪魔軍団という悪の一味だったの……でもそんな組織を裏切って、私と父は正義のために戦うことにしたの。私たち親子に愛を教ええくれた人間を守りたいから……」

シロ

「お前も大変な人生を送ってきたんだな」

ビル

「そうだわ！今度の天下一ぶどう狩りにアンタも出たら」

シロ

「天下一ぶどう狩り？なんだそれ？」

ビル

「武道の達人が、制限時間内にどれだけブドウを取ることができるかを競う大会よ」

シロ

「くだらね〜、悪いがそういうものには興味がね〜」

ビル

「出てくれないなら、パンツ仮面の正体ばらすわよ」

シロ

「おい、パンツ仮面じゃねー、アクショングレート仮面だ」

しばらくシロは悩んだ。

シロ

「おい、その大会に優勝すれば何かもらえるのか？」

ビル

「もちろん。私の父のサインがもらえるわ」

シロ

「お前の親父のサインなんかいらねーよ」

ビル

「大会は10日後よ」

シロ

「まだ出るとは言っていない」

ビル

「詳しい事はこのチラシを読んで」

シロ

「人の話を聴け！しょうがねー、出てやるか……あつ、俺これから用事があるから、幼稚園の先生には腹が痛いからそのまま帰宅したと伝えといてくれ」

そう言つて彼は去つていった。

ビル

「えっ！ちよつと！……しょうがないわね」

シロはこんなくだらない大会に一人で出るのが嫌なため、他の仲間を誘いに行ったのだ。

果たして大会の優勝者は誰なのか？

サタン閣下のサインをもらうのは誰なのか？



## 第1章 偉大なヒーロー誕生（後書き）

どうでもいいことですが、今日で私31歳になりました！

## 第2章 2月22日は生時の誕生日！

天下一ブドウ狩りに一人で参加をするのが嫌なシロは、他の仲間を誘おうとまずはズラのところにやってきた。

ズラ

「何！優勝すれば犬、猫の肉球を触り放題券がもらえるだよ」

シロ

「ああ（良かった。こいつがバカでほんとに良かった）」

ズラ

「よし、俺も出るぞ！エリーザ、優勝したらお前にも犬、猫の肉球を触らせてやるからな」

そのときだった。

現実の世界から作者であり、主人公の生時の声が聞こえたのだ。

生時

「皆元気か？今は現実の世界から話かけているんだが、十日後たぶんバイト入っていないから、オラも参加するぞ。ちなみに2月22日でオラ31になりました。いや、今回のサブタイトルはすごく重要だね。じゃあ、十日後に会おうな」

シロ

「……ズラ、なんか幻聴が聞こえたが」

ズラ

「気のせいであろう」

……

その後シロは、ノムチャやプーえもん、美奈子、ピコちゃん、栗八にも出るように薦めた。

目玉の天さんは「背が小さいから、出てもワシはぶどう狩りが出来ん」といつて、チャオゾウは「拙者が出ては目にもとらぬ速さで優勝してしまうでござる。それでは他の出場者に申し訳ない」といい彼ら二人は出ることを拒否した。

そしてシロは家に帰り驚いた。

なんとウーノスケがまた山で子供を二匹、いや二人も拾ってきたのだ。

シロ

「おい！何でも拾ってくるのはやめろよ」

ウーノスケ

「あは〜ん」

と言つて、彼は話を聞いていなかった。

だが、子供の一人はあの男にソックリだった。  
アナ53での戦いで戦死した虎乃心に……

シロ

「こ、こいつ、間違いなく虎乃心」

そう、この子供こそ、未来から来た虎乃心の子供時代なのだ。

シロ

「坊主、名は？」

子供A

「真二」

シロ

「優しすぎて剣客にはそぐわね、お前は今から虎乃心と名乗れ」

子供A

「虎乃心」

シロ

「未来ではお前の師匠は美奈子、いやマルス・フランソワだが、代わりに俺が、最強の剣術けんじゆつをくれてやる。んで、もう一人のほうは？」

子供B

「んちゃっ！あたし坂田アラテン。博士に正義のために作られたアンドロイド。何でもあたしにはお兄ちゃんがいるらしくって、それで探していたところ」

シロ

「坂田にアンドロイドってお前を作ったのってもしかして、坂田銅時」

アラテン

「うん。そつだよ。もしかしてアンタがあたしのお兄ちゃん？」

シロ

「ま、まあ、そついうことになるかな（おいおいとんでもね、奴

を作ったな親父も……モデルのアニメのキャラと同じならこの世界では最強だぜ」

こうして新たな仲間と、妹も加わり、十日が過ぎ、戦士たちは美奈子の家に集まった。

美奈子

「へー、この子が虎乃心くんで、この子がシロさんの妹のアラテンちゃんなんだ」

シロ

「おしゃべりはそれまで、早く行かなければ、作者<sup>ばか</sup>が来てしまう」

美奈子

「そうね」

美奈子は急いで四次元袋からどこで ドアを出した。

プーえもん

「あのう、いいかげん返してもらえませんか。その袋……」

美奈子

「だって、あなたのものは私のもの、だから返すことが出来ないわ」

プーえもん

「そんな」

シロ

「誰のものでもいいから、早く行くぞ」

戦士たちがドアをくぐり抜けてから、数分後……

生時

「やつほー、皆、久しぶり……あれ！？誰もいない……ま、まさか置いてかれた、置いてかれた、置いてかれた」

と、彼の「置いてかれた」という叫び声が山びこのように美奈子の近所中に叫び響いた。

彼の目から涙がこぼれた。

しばらく彼はその場から動けなかった。

作者でもあり、主人公でもあるのに、他のキャラたちからの扱いに悔しさを感じていたのだ。

生時…… 2月22日で31歳になったクローン病と戦いながらネット作家を続けている男……

だが、クローン病の専門誌「C C J A P A N」（三雲社）の今月号には彼の体験談が載っている。そう思うと、生時の目から涙が消えた。そして……

シロ

「おい、いつまで自分をアピールしているんだ」

その言葉を聞いた瞬間、生時は喜び微笑んだ。

戦士たちは生時を迎えに戻ってきてくれたのだ。

再び生時の目から涙が流れた。

だがこの涙は悔し涙ではなく、うれし泣きだ。

この日のことを生時は忘れないだろう……

だってこんなにもすてきな仲間が……

シロ

「長げゝよ。普段はコメディだとほとんど文章で表現せず、キャラのセリフだけでごまかしているくせに」

生時

「よ、よし、行こうぜ！皆！」

こうして戦士たちはぶどう狩りの会場へ向かった。

だが、そこには新たな事件が待っているということはこの時は誰も知らない。

## 第2章 2月22日は生時の誕生日！（後書き）

クローン病などの専門誌「CCJAPAN」（三雲社）の今月号に  
僕の体験談が載ります（発売は今月の26日）

人を励ますために書いたつもりが、僕自身が励まされました。  
どうもありがとうございます。

生時



### 第3章 謎の少年（前書き）

今回ちょっとストーリーが短かったみたいで、すみません＞＜

### 第3章 謎の少年

大会の会場に着いた戦士たち……

アナウンサー

「では、これより1万2千325回、天下一ブドウ狩りを始めたいと思います」

栗

「1万2千325回って、そんなにもやっていたんですかこの大会」

アナウンサー

「世界中の武道の達人たちが、時間内にどれだけブドウを取ることが出来るかで、勝敗が決まります。優勝者にはなんと前大会ではブドウを一つも狩る事ができず、ビリになったあのサタン閣下のサインがもらえるというまさに、武道家たちのための大会だ」

出場者

「おお」

ズラ

「おい、シロ夜叉！優勝者は肉球触り放題券じゃなかったのか」

シロ

「お前も作者並に馬鹿だな。そんなの嘘に決まっているじゃん。触りなければその辺の野良犬か野良猫の肉球を触って来い」

ビル

「あつ、シロ君ほんとに来てくれたんだ」

シロ

「しょうがねーから来てやった。馬鹿共をこんなに引き連れてな」

栗

「この人が、シロさんが言っていたサタン閣下の娘さんですね」

戦士たちが会話をしていると、二人の少年が近づいてきた。

一人は赤いマントに青いマスクをした小柄な少年。

もう一人は青紫のマントに緑のマスクをした小太りの少年だ。

謎の少年

「武道の達人が集まるこの大会なら必ず来ると思っていました。白ご飯さん、いやグレート仮面」

シロ

「誰だてめー！どうして俺の正体を知っている」

少年はうつすらと笑った。

果たしてこの二人は何者なのか？



## 第4章 ヒーローも大変だ

謎の少年二人に話をかけられたシロ。

しかも彼がグレート仮面だと知っている。

果たして彼らは何者なのか？

次回に続く。

栗

「次回に続くじゃないだろう。まだこの回、始まったばかりだから、それと前回短すぎだから」

謎の少年

「僕の名前はパイオウシン、ヒーロー星からやってきたピーマンという正義の味方です。で、彼はピーマン4号またの名をキビヤンです。」

シロ

「で、その正義の味方が俺になんか用なのか？」

ピーマン

「我々はヒーロー星から宇宙の平和を守るのが仕事です。でも、最近になり、正義のヒーローをやっているも何の特にもならないという理由から、悪の道へ走るものが増えてきたんです」

生時

「やばい、腹が痛い。そういう時は痛み止めのソセゴンを飲まなくては」

ピーマン

「僕たちがこの星にやってきたのは、その裏切り者の粛清……でもかつての仲間を殺す事なんて僕には出来ません。シロさん、いやグレート仮面という正義のヒーローはすでに我々の星では有名です。パンツを被って活躍しているのですから」

シロ

「そ、そんなことで有名になっちゃったの俺！喜んでいいの？悲しんでいいの？どっち」

ピーマン

「そんな貴方だから」

シロ

「俺にその裏切り者を殺してくれと」

ピーマン

「はい」

栗

「そ、そんな事、シロさんに出来るわけが」

シロ

「いいぜ！」

栗

「な、シロさん！」

シロ

「こんなくだらん大会に出るより面白そうじゃないか」

ズラ

「優勝しても肉球触り放題券がもらえるわけでもないし、汚れた仕事は俺たちのように汚れた者がやるべきだ」

シロ

「で、どこにいるんだ。その裏切り者は」

ピーマン

「分かりません……ただ、数ヶ月前まであの男と一緒にいたという情報は得ています」

シロ

「あの男？」

ピーマン

「悪の科学者、ボヤディー。こいつは今地球に来て、地球のお宝を全て盗もうとしているらしいのです。もちろんこの男を逮捕するためにもこの星に来ました。そしてうまくいけば、こいつから何か情報が得れるかもしれません」

キビヤン

「この男が今どこにいるかは、すでに調査済みや」

シロ

「よし、俺とズラ、そしてあんたらとで行こう。他のやつらはこの大会に出るなり、他ごとするなり好きにしてな。美奈子、四次元袋は借りていくぜ」

美奈子

「い、いいけど」

栗

「ぼ、僕も行きます。シロさんに人殺しはさせない」

シロ

「栗八……しょうがね、足手まといになるなよ」

美奈子

「シロさん、生時さんも行くって言っているわ」

生時

「い、言っていないせんよ。でも、美奈子さんが行けというなら、僕は行きます。それが美奈子さんへの愛ですから」

シロ

「生時……お前だけはくるな。足手まといになるとかのレベルじゃないから」

生時

「いや、美奈子さんに頼まれれば断れません」

シロ

「美奈子、こいつについて来るなと命令してくれ」

美奈子

「生時さん、そのまま帰ってこなくていいですからね」

シロ

「この女は……しょうがね、6人で行くか」



キビヤン

「奴は沖縄に秘密基地を作って、お宝を盗むためのマシンを作っているはずや」

シロ

「よし、沖縄へ行くぞ」

6人の戦士たちはどこで ドアで沖縄へ向かった。  
果たして、裏切り者を見つけ、粛清する事が出来るのか？

## 第5章 悪と正義

沖縄にたどり着いた戦士たち……

ピーマン

「あその建物にどくろのマークがあるじゃないですか。あれは間違いないボヤディの秘密基地です」

秘密基地の中……

ボヤディ

「やあ、全国の人妻ファンの皆さん、ボヤディですよ。実は僕ちゃんここで悪い事をするために、ロボットを作っていたんだけど、ちよつと油断した隙に元ヒーローのサルに持っていかれちゃったのよ。まったく、あの猿、最初から僕ちゃんのロボットが狙いだっただわ」

謎の男

「気を感じる……6人か……しかもその中の二人はピーマンの気だ……」

ボヤディ

「なに！あいつらがここへ！」

そう言つて、二人は外に出た。

ピーマン

「ボヤディ、おとなしく縄につけ、そして、アイツの居場所を教えるんだ」

ボヤディ

「いやだよ」だ」

キビヤン

「1号はん、あれ、ヤッターブラはんでっせ」

ピーマン

「ほ、ほんとだ！ヤッターブラ、君まで裏切ったのかい」

シロ

「誰だよそのヤッターブラブラって」

ピーマン

「ヤッターブラ、彼も僕らと同じヒーロー星出身のヒーローです。ヒーロー星の中でも一番正義感の強い男でした。なのに何故？」

ヤッターブラ

「ヒーローなんてやっていても何の特にもならない。それどころか、お前らの仲間の2号をあんふうにした。お前たちのほうこそ、いつまでもアイツの言う事を聞いているつもりだ」

シロ

「アイツ？」

ピーマン

「僕らの星の王、バードシン様です。僕らが肅清するよう命令されたのは、僕らピーマンの2号、通称ブルーベアです。僕らの星では自分がヒーローだという事を仲間以外に知られてはいけない掟なんです。でも、数日前、ブルーベアはある星で事件を解決した後、休憩し

ようとマスクを取り、そのときに一般人に姿を見られてしまいました。」

シロ

「で、錠を破ったものはどうなるんだ？」

ピーマン

「バードシン様によって、動物に姿を変えられてしまうのです。ブーバーは猿に変えられました。兵士たちがその後、マスクとマントを奪おうとした瞬間に、ブーバーはそのまま脱走、ついに王から謀反者として粛清するように僕らは命令され、ブーバーを探していたのです」

ボヤディ

「ピーマン、どうだ。お前たちも僕ちゃんの仲間にならないか。ヤッターブラもブーバーも僕ちゃんの仲間になると自ら言ってきたのだよ。もっとも、ブーバーは僕ちゃんのロボットを盗むために仲間になったふりをしていたようだが」

ピーマン

「ブーバーはどこへ行った？」

ボヤディ

「そんなこと僕ちゃんが知りたいよ。僕ちゃんのロボット、マジンZを盗んだんだから」

キビヤン

「とりあえず、あんさんだけでも捕まえさせてもらっで」

ボヤ

「ヤッターブラ、やっておしまい」

ピーマン

「ヤッターブラ……いいだろう……僕が相手だ」

ヤッター

「面白い！くらえメカ爆弾」

ボヤディ

「説明しよう。メカ爆弾とは、爆弾の事である」

栗

「ただの爆弾でいいじゃん」

ボヤディ

「ヤッターブラのメカ爆弾がピーマンに直撃。果たして、ピーマンは彼を倒せるのか。そして、ブーベーは何をしようとしているのか。ピーマンたちは宇宙を救えるのか」

栗

「なに！ドラ ンボールみたいなナレーションをやっているんだ。モデルのアニメキャラとドラ ンボールのナレーションの人が同じ声優さんだからって」

ヤッターブラ

「どうした！なぜかかってこない」

ピーマン

「君やブーベー、他に裏切ったヒーローたちの気持ちは分かる。でも……でも、僕らはヒーロー何だ！それがヒーローとして生まれた

僕たちの使命……」

ヤッター

「……」

ヤッターブラの動きが一瞬止まった。

だが、再びピーマンめがけて、爆弾を投げようとした。  
そのとき、ピーマンを守ろうと、シロがピーマンの盾となろうとした。

シロ

「知っているか！この世には悪魔から正義の味方になった奴がいることを……てめゝはただ、正体がばれ動物にされるのを恐れている臆病者だ。そんな奴は最初からヒーローなんかじゃねゝ」

ヤッター

「くっ……」

シロ

「てめゝが動物になろうが、悪になろうが俺の知った事じゃない。だが、そんなお前をこいつらはヒーローだと今だに思っている。仲間だと思っているんだよ。だから手を出さないんだ。お前に助けられた奴らが、今のお前の姿を見たらどう思うだろう……」

ヤッターブラの動きが完全に止まった。

ボヤディ

「何をしている。早くこいつらを殺せ！」

ヤッターブラは拳を強く握り締め、下を向いたまま動こうとはしなかった。

ボヤ

「おい、この役立たず。お前なんかヒーローどころか、悪役にもなれない最低男だよ」

ヤッター

「悪役になれないか……そうさ……俺は悪役じゃねー！正義の味方ヤッターブラだ！」

そう言つて、爆弾をボヤディに向けて投げた。

チュドーン！！

と音が響き、ボヤディは瀕死の状態となった。

ヤッターブラ

「ピーマン、俺は裏切り者だ。覚悟は出来ている。その手で俺を」

シロ

「裏切り者？そんな奴はいねー、お前はアイツを逮捕するために侵入捜査をしていただけだろ！なあ、ピーマン」

ピーマン

「え？う、うん、そんだよ。君のおかげでボヤディを逮捕する事ができたんだ。裏切り者なんてここにはいなかった」

ヤッター

「す、すまない……それより急いで、ヒーロー星に戻れ、ブーベーはボヤディの作ったロボットでヒーロー星を消滅させる気だ」

ピーマン

「なんだって！」

ズラ

「テロなんかやったら、関係のないものが巻き添えをくう……ちくしょう、テロリストめ！」

栗

「アンタも前はテロリストでしょうが」

生時

「聞こえるか！ボヤデイ！オラ、ベズーラと戦うことにした。誰もいない場所に変えろ！」

栗

「何言っているんですか。あの人」

シロ

「ほっとけ」

ズラ

「な、何！ま、負けんぞ……こうなったら、虎乃心、ママを大切に  
な……」

栗

「どうしましょうあの二人……」

シロ

「あの二人はお前に任せた」



栗

「ちょっと……僕一人じゃ」

シロ

「俺はあいつらと、ヒーロー星に行ってヒーローになってくる」

栗

「で、でも……」

シロ

「今度の敵はかなり厄介だ！出来る事なら、話し合いで解決したい……でももし俺に何かあつたら、この地球を守るのはお前だ！」

ピーマン

「今キビヤンが僕らの宇宙船を取りに行っています」

シロ

「頼んだぜ！」

しばらくしてピーマンの宇宙船が現れた。

シロはピーマンと一緒に宇宙船に乗り、ヒーロー星へと向かった。  
果たしてブーベーのテロ行為を阻止できるのか？

## 第6章 マジンズに乗ったブーベー略して……

ヒーロー星にたどり着いたピーマン二人とシロ……  
だが、星は無事だった。

シロ

「おかしい、奴はまだ来ていないのか？」

その時、彼らに近寄ってきたものがいた。  
そう、この星の王、バードシンだ。

バード

「奴はこの星には来ていないぞ」

シロ

「誰だてめ？」

ピーマン

「この星の王、バードシン様です」

シロ

「てめーか！頑張っているヒーローを動物にしたのは？」

バード

「君らの星には君らの星の法律があるように、この星にはこの星の法律がある。私だって好きでアイツを猿にした訳じゃない……」

シロ

「けっ！」

バード

「シロ君、君の事はよく知っている」

シロ

「パンツを被ったヒーローだからだろう」

バード

「それもあるが、君はあのペリーザを倒した男……我々ではどうしようもなかったあの男を倒した男だからよく知っている」

シロは照れながら、「フン」と一言言った。

ピーマン

「それより、ブーベーはどこに？」

バード

「おそらく、まだ地球にいる。奴はもうこの宇宙を破壊するための野蛮なサルになってしまった」

シロ

「そうしたのは、てめゝだろうが！」

バード

「そつだ。何千年も前からの掟に従い、私はアイツを猿にした」

シロ

「てめゝの顔面を殴ってやりたいが、今はそれどころじゃねゝ。もう一度地球に戻るぜ！ピーマン」

ピーマン

「う、うん……」

その頃地球では……

栗八、生時、ズラが、美奈子たちに全てを話していた。

ズラ

「いよいよ地球、いや宇宙もお終いか」

生時

「いや、一つだけ方法はある。」

栗

「アンタのは信用できないんですが」

生時

「信じる、信じないは勝手だ。だが、これしかない」

ズラ

「して、その方法は？」

生時

「フュージョンだ！」

一同

「フュージョン！？」

生時

「ああ、二人の人間が一つになることで、最強の戦士が誕生する。」

見本を見せよう。美奈子さん手伝ってくれ」

美奈子

「え？私？」

生時

「まず、俺が服を脱ぎ、次に美奈子さんが服を脱ぐ。そして美奈子さんの穴に俺の棒を」  
といった瞬間、栗八のものすごいツツコミが炸裂！

栗

「アンタ何しようとしているんだ。それただのS Xじゃんか」

生時

「いや、うまくいけば、数年後には最強の戦士が誕生する」

栗

「数年後じゃなく今必要なんだ！しかもお前のあれでは、最強の戦士は誕生しねえよ」

生時

「そんな〜ひどい、ひどいわ」

アラテン

「ほよよ。そのブーベーってつおいの？」

一同

「最強の戦士いた」

栗

「アラテンちゃんがいれば、シロさん以上に心強いじゃないですか」

と、その時、マジンZに乗ったブーベーが現れた。

一同

「あれ、何で地球にいるの？」

栗

「よく分かりませんが、アラテンちゃんがいれば大丈夫です」

果たして、アラテンちゃんですべて勝つことが出来るのか？

## 最終章 平和を願って！

戦士たちの前に現れたマジンズに乗ったブーベーだが戦士たちには最強のアラテンちゃんがいる。果たして勝者はどっちだろうか？

ブーベー

「ウツキー（ブーレストファイヤー）」

ブーレストファイヤー……マジンズのブレスファイヤーと同じような技で、胸の放熱板から放つ3万度の熱線で敵を溶かす。

栗

「やばいですよ。あんなのくらったら」

アラテンちゃん

「バイちゃ砲」

バイちゃ砲……アレちゃんの「んちゃ」と同じで、口から発射される凝縮エネルギー弾。

お互いのエネルギー弾がぶつかり合う。

そして、アラテンちゃんの「バイちゃ砲」がマジンズのブーレストファイヤーを吹き飛ばし、そのままマジンズに直撃した。

マジンズはボロボロになり、中からついにブーベーが現れた。

ブーベー

「ウツキー（何て奴だ）」

アラテンちゃんの攻撃はさらに続く。

そのまま体当たりし、ブーベーを吹っ飛ばした。

もはや敵なし！

だが、アラテンちゃんの攻撃は終わらない。

このままでは間違いなくブーベーは死ぬ。

だがその時、シロたちが光の速さで、地球に戻ってきた。

栗

「シロさん、パーマンさん」

アラテンちゃんがさらに攻撃をしようとしたので、シロは彼女を止めに入った。

アラテンちゃん

「ほよ？」

シロ

「よくやった。アラテンちゃん。さすが俺の妹だ。だが、ここからは俺に任せろ」

ブーベー

「ウイー （殺せ）」

シロ

「何を言っているか分からないが、おめゝの気持ちはよく分かるぜ」  
そう言って背中から木刀を出した。



シロ

「人間に戻れなくても、人間の心だけは取り戻してくれ」

そう願ひ、シロがブーベーに攻撃を仕掛けた。

だがその時だった。

ブーベーにエネルギー波が直撃した。

撃ったのは、ヒーロー星の王バードシンだ。

バードシン

「ブーベー、すまなかったな。私が掟なんかにとだわったばかりに……だが、これで全て解決した」

シロ

「解決したと！動物にし、さらに殺して何が解決だ」

バード

「君は何か勘違いをしている。よく見たまえ」

シロ

「何！？」

ブーベーの体が光、そして美しい女の子の姿に……

ピーマン

「パン子！」

シロ

「パン子って？まさかあの猿の本当の姿って」

キビヤン

「ピーマン2号、通称ブーバー、本名は星野パン子で、1号はんの彼女でっせ」

一同

「なに〜！」

さすがに皆、驚いた。

パン子

「うっ……い、1号……ごめんなさい」

ピーマン

「もういいんだ。君が元に戻ってくれば」

生時

「パン子だと、孫 空の孫、パ てき存在になるのか……普通ならウブてき存在になるはずなのに」

栗

「生時さん、さっきからうるさいです」

生時

「……」

バード

「ピーマン2号、今後ピーマンに変身する事も、ピーマンと名乗る事も許さん」

パン子

「はい」

バード

「これからは普通の女の子として生きなさい。それから1号!」

ピーマン

「は、はい!」

バード

「これからは、宇宙の平和だけでなく、彼女も守ること! いいね」

ピーマン

「はい」

バードシンはそのまま自分の円盤に乗って、星へ帰っていた。

ピーマンたちもシロたちにお礼を言って、かえって言った。

彼らの戦いは終わらない……

この世に悪がいる限り……

END

キャスト

生時……生時

美奈子……如月美奈子

以下省略

原作 生時

脚本 生時

武術指導 修羅生死

音楽 生時

主題歌

「愛の女神〜ヴィーナス〜」

作詞 生時

作曲 生時

歌 レジェンド

企画 生時

プロデューサー 生時

協力 小説家になろう

監督 生時

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9750j/>

---

ソセゴンボールGT

2010年10月9日00時56分発行